

■殺す■

朝日新聞科学部篇『心のプリズム』1972.3.20

「きょうの初年兵訓練は、生きた人間を突殺すんだ。わら人形よりやさしいぞ」と上官。

中国の老いた百姓や女たちは涙を流し地面に頭をすりつけて命ごいをした。「わたしに割り当てられたのは2歳ほどの幼児を抱いた母親でした。ふっと、自分の幼い日のことを……。が、つぎの瞬間『人情にひかれて戦争に勝てるかッ』とどなる古参兵の顔を思い出しました。命令なのだ、とわたしは……」

剣は泣叫ぶ幼児を貫き、母親の胸に刺さった。「そのあと、百人余りの村人を生埋めにしました。思えば、すまないことを……」

いまは奥さんや娘さんと静かに暮す川崎市の大工Sさんは、30年前のことを涙をにじませて話した。

同じことは、1968年南ベトナムのソンミ村でも起った。

「泣叫ぶ女、子ども、老人が次つぎにミゾに押しこめられ、掃射された。両手をあげて哀訴嘆願する老婆も撃ち殺された」と、アメリカ兵は証言した。

「ヒトは、もっとも残忍な動物です」と、大阪大学の前田嘉明教授（心理学）はいう。

「ヒトはヒト同士で殺し合いをします。自然界の動物には、そのような例はありません。猛獣たちは鋭いキバで獲物をかみ殺すが、このキバを同種の仲間に対して無制限に使うことはない。よほど飢えない限り、トラがトラ同士で殺し合いをすることはない。

片方が降伏の態度を示せば、それで戦いは終る。サルも、オオカミもそうだ。「これは、種族を絶やさないための知恵でもあるのでしょうか。動物たちの“殺す心”には、きちんと歯どめがかかっています」

しかし、人間という動物は、命令されたり、やってもよいという一見正当な理由を示されたりすると、相手の苦痛におかまいなく、残忍なことをやっての



ける。

米国エール大学のミルグラム博士は、こんな実験をした。

「罰として電気ショックを与えると、どれくらい学習に効果があるかを調べたい。ご協力を……」

集った正常な男子 1000 人。実験主任の指示に従って電気ショックの電圧を
しだいにあげてゆく。罰を与えられる生徒たちの悲鳴や泣声は、電圧があがる
たびに激しくなる。

「こんな残酷な実験はいやだ。帰らせてください」と、人びとは申出る。

「大切な実験です。続けてください」「あなたに選択の余地はない。続けねばな
りません」と、無表情な実験主任。

3 人に 1 人は途中でやめて帰った。

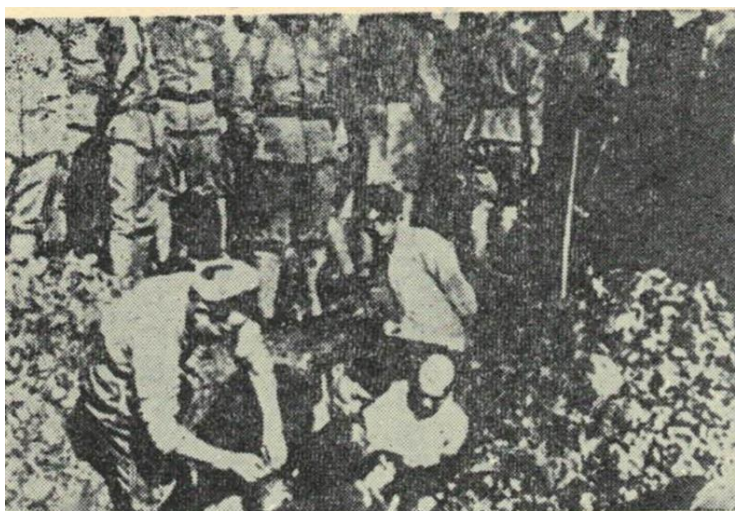
が、3 人のうち 2 人は、悩みながらも最高の 450 ボルトまで目盛りをあげた。
死の危険さえあると、あらかじめ知らされていたにもかかわらず……。

ミルグラム博士らは驚いた。そんな残忍なことができる人間は、1 万人に 1
人ぐらいしかいないだろうと考えていたからだ。人の心の残忍性は、予測をは
るかに越えていた

(生徒の役をつとめたのは、実をいうとサクラで、電流は通じていなかった。
演技しただけだった)。

戦争をするかしないかは、
為政者が決める。為政者は、
国民の攻撃心や敵意、憎悪、
残忍な心をたくみに刺激し
て、開戦の準備を整える。

そして、戦争が始ってし
まったら……、あなたも、
川崎市の S さんやソンミ村
のアメリカ兵と同じような
残虐行為をやっている。



30年前 南京で生埋めにされる中国人たち ながめているのは
日本兵 第二次大戦中 日本人は多くの中国人を虐殺した